「托卵」
刊行記念インタビュー

僕は仙人になりたい

ひさうちみちお

──長編漫画「托卵」は、人間社会の構造から生まれ出る〝意識〟を、明らさまに描いた、まさに燻し銀のような作品。さらに今後の展開が期待されるひさうち氏に迫る、本誌ならではのインタビュー!!

視点を持たず、風景的に描く

―久々に出された単行本「托卵」が、大変好評なのですが、この物語を描こうとした切掛は何だったのですか？

久内　あれはですね、以前NHKでカッコーの托卵について放送した番組がありまして、まぁ、托卵とは鳥が他の違う鳥の巣に卵を預ける事なんですね。で、その番組を見ていたら、まず、預ける時に数を合わすために、オオヨシキリの巣にある卵の中の一個を落しちゃうんですね。それでまたどこかへ行ってしまう。

　でもこれがウマイ事にカッコーの雛が一番早く孵るんです。で、孵ったカッコーの雛は母親の愛情を独占するため、オオヨシキリの卵を皆落としちゃうんです。産まれたばかりの雛が必死になってね。しかも、長い間そんな歴史を繰り返して来たから、卵を落しやすいように、背中に卵を受ける窪みが出来ているんですよ。それを見てるとね、もう「生きんが為に」という感じなんですね。

―まさに本能ですよね、それは。

久内　とにかく考えてやっていないですよ。もうDNAかなんかに組みこまれているんですよね。それでオオヨシキリは知らずにカッコーの雛を育てるんです。でも段々とオオヨシキリもそれが分かってきたらしいんですよ。それで番組の中で実験したんですね。カッコーの剥製を棒につけて、オオヨシキリの巣の所へ持って行くんです。するとオオヨシキリはもの凄い勢いでその剥製の頭をガ――ッと攻撃するんです。もう首がもげてブランとなってるのに、それでもガ――ッとやるんです。あれはね、何かもう本当に「憎悪」という感じだったですよ。

―それを見て、もし人間に置き換えたらどうなるか、という事を考えたんですね。そこから「托卵」の構想が……。

久内　そうですね。人間がそういう事をしたら絶対に差別の種になりますよね。実際しなくても、そういう噂があるだけで充分なりますよね。まぁまったく同じではないけれど、ナチのユダヤ差別というのはそういうところがありますよね。他人の国に勝手に入って来て、勝手に金儲けして、また「連中は繁殖力が強い」なんて事を言っていたワケでしょ。それで「ユダヤは世界を征服する」なんて事を、もっともらしく言っていたんですからね。

―「托卵」はそのまま、民族間の差別の問題を描いているワケですが、この作品は、差別する側とされる側と、両方を描きこんでいますね。普通はどちらかに片寄ってしまいがちなのに。それでまたその構造が面白くて、差別する側にもピッポのような裏切者が出て来て、そこにまた差別のようなものが生まれて来る。そんな芸の細かさが、物語を実に盛り上げていると思うのですが。

久内　「托卵」がその水準に達しているかどうかは別としても、面白い話というのは、上から全部見渡しているようなとこがあるからじゃないですかね。でも、それがいわばマイナーな条件になっているのかもしれませんね(笑)。どちらに味方していいのか分からないような事になっちゃいますから。

でも、漫画に限らず、映画でも小説でも、悪者は悪者でハッキリと分かる方が読みやすいですよね。形があると安心できるから。例えば水戸黄門みたいに、ここでこうなると分かっていながら、ずっと溜めて溜めて、そら来たっ、ていう形がありますから。そういう方が楽しめる人が多い、というのはよく分かりますね。

——特に、お茶の間は好きですからね、そういうのが(笑)。でも、なぜそういう見方をするようになったのですか、一つの物語を風景のように描いていく、というのは、どこから生まれたのですか？

久内 僕の場合、両方の人達と接する機会があったからかもしれませんね。僕には朝鮮人の友達がいたんですが、大人はそういう子供達を、もの凄く差別するんですよ。それがとても嫌で嫌で、「なんでそんな事いうねん」て言ってたんです。でも何回言ってもダメなんですね。それで僕も段々疲れてきちゃって。でもそうなると今度は逆に、この差別意識のある大人達は、どういう所からそういう意識が出て来たのか、て思うようになって来たんですね。それ以来、例えば親とケンカをしたりしても、親はどういう立場で自分に怒っているのか、という事をまず考えるようになってしまったんです。

——そういう経験がずっと引きずられて「托卵」が出来上がったワケですね。解説で呉智英氏も書かれていましたが、「托卵」は久内さんがずっと暖めてきたモチーフだったと。まったくその通りですね。

久内 基本は原体験といったら大袈裟ですが、そういう風景の中で育ったという感じはなくさないようにしようと思っています。それに、視点を持たずに風景的に描くっていうのを原則にしているんです。「托卵」のように、架空のものを舞台にした場合でもね。

子を求める母の姿に憧れる……。

——「托卵」には女性があまり出てこないのですが、そんな中で母と子を描いているところがありますよね。

久内 そうですね、例えば〝母親〟に関していえば、「托卵」や以前描いた「瞼の母」にしても、母親を求める子供っていうのは、絵としても凄く好きなんですけれど、ただ、自分の場合は母親に対する解消しがたい感情というのが全然無いから、いつもウソを描いているようで、すごくイヤなんですよ(笑)。

——イヤなのに、どうして描いてしまうんですか？

久内 いや、なんか感動モノが好きだから(笑)。一番涙腺を刺激するのが親子モノなんです。自分がホレた女に逢いたいというよりも、親の方がいいんですよ。だから映画なんかでも、恋人同士の別離だと、あまりかわいそうな気がしないんです。ところが、一時、中国残留孤児を問題にしたドラマがよく作られましたよね。中国で育って結婚した息子が、日本に母親に会いに来て、でも、母親にはすでに引き取れない理由があってね。それで息子が「やっぱり中国に帰ります」って。で船の別れになるんですよ。船尾に立った息子が母親に向って「再見（ツァイツェン!!）」て呼ぶ。もうその一言で、ドワーーッと来るんですよ(笑)。

——息子が大人になるにつれ、母親は年老いていくワケですから、余計ドラマチックに感じるでしょ。

久内 そうそう、それに一緒に生きていないっていうのもあるから、余計ね。それにもうひとつ、僕は母親の事をわりと批判的に見ていましたから。だから余計

に子供を求める母親というのが、憧れみたいな格好であったんですよね。

——批判的というのは、よく思春期に反抗的になったりするのとは別にですか?

久内　ええ、うちの両親はしょっ中ケンカしていましたからね。父親はわがままな所もあったけれど、一応男だから、そういう事は子供には言わないんですよ。でも母親の方は、それを子供にいちいち報告するんです。グチるんですよ。それが子供はキライなんですよ。一番批判的に見ていた、というのはそういう所なんです。だから、いつもどっちもどっちだな、とか、早く別れりゃいいのに、と思っていました。

——子供の頃から?

久内　小学生の時から思ってましたね。だって家の中でしょっ中ケンカしていれば、子供はイヤですよ、絶対に。

——それじゃ、よく、好きになる女性は母親に似てるって言う人がいますが、そういう事はないんですか?

久内　それはないですね。でも夢でね、母親とやってる夢を見たことがあるんですよ、2回位。その目覚めた朝の気持ち悪い事ったら(笑)。

——凄いね。

久内　兄とやった夢もありましたよ(笑)。

——何ていう事を!!(笑)

久内　どうなってるんでしょうかね(笑)本当はマザコンだったりするのかな、それを意識の上で必死に押えているのかも。

——案外そうかもしれませんね。

久内　でもそれは凄く嫌だなぁ。母親とエッチしたくないもん(笑)。

ホントは屁理屈が好きなんです。

——久内さんは一度東京に出て来ていますよね。

久内　ええ、4年くらい居ました。

——どうして出て来たんですか?

久内　あまり逢いたくない友達が家に来るようになったから、なんかイヤなヤツなんですよ。初めは適当にやって帰してたんですけれど、ある日外から帰って来たら、またアレが来たっていうから、それでなんかイヤになっちゃって(笑)。

——それだけで?

久内　まあひとり暮しをしたいと思ってた事もありましたしね。それに、ガロに持ち込みたい、というのもあったんです。2、3回は郵送したんですが、1回目は原稿用紙の裏表に描いちゃって(笑)で、印刷できません、て返事が書いてあってね。次も佐々木マキさんの真似みたいな絵でしたから「作品はオリジナリティでありたいです」みたいな批評をいただきました。

——結構、没をくらってたんですね(笑)。

久内　それからね、直接青林堂に持って行ったりしましてね、その頃は鈴木翁二さんや安部慎一さんに影響されてね、二人の絵をたして二で割ったような絵を描いていましたから。

——今とはずいぶん違った感じですね。

久内　そういう絵の期間って、長かったような気がします。でも、当時ガロにはそんな絵を持ってくる人が凄く多かったようで、それで南伸坊さんに「それじゃ損だし、もっと自分の線を伸ばしたらい い」というアドバイスをいただきまして。そんな絵を描きながらも、時々、今の絵柄につながるようなところもあったんですね。それで「このコマのこおゆう絵はいいんじゃないの」と言っていただいたんで、それで指摘されたものをそのままこの方向で伸ばしていこうと思ったんです。

——ストーリーも真似たような所はあったんですか？

久内　レベルとしては全然あそこまでいっていませんでしたけれどね。でも、なんか割と自分の事をよく描いていました。

——それは若い頃によくありがちな描き方で……。

久内　そう、ありがちなね(笑)。もともと漫画家になろうと思ったのは、永島慎二さんの「フーテン」を読んでからなんですよ。それで絵柄をかえる前に長井さんに見てもらった事もあって、「これは、貴方のお友達が読んだら面白いかも知れないけど、貴方を全然知らない人が見たら、何の事か分からない」って言われました(笑)。実に適確なお言葉を(笑)。

——それで、最終的には「パースペクテイブキット」で華々しくデビューして、その後「○○に捧ぐ」とかいって、一時スケベな漫画を描いてましたよね。それで変態という肩書きをほしいままにして。

久内　いやあの時はドスケベのまんまですよ(笑)。そおゆう欲求が凄くあるのに満たされないから、ていう部分はありましたね。何ていうか、満たされなくてドスケベになっていくようなね。あの、満たされてもドスケベな人っているでしょ。それはダメですね。満たされなくてドスケベじゃないと、頭の中がカラまわりして遠心力がつかないんですよ(笑)。

——そこにくると変態って理屈が入っていません？　フェチとか。

久内　多分ね。考えれば変態て理屈をたどっていきますからね。まぁ、例えば早い話、フェチにしても、ハイヒールが好きだっていうのは、それはそのハイヒールに憧れる女の縁(よすが)を求めていくワケですから、それはちゃんとつながっているんですよね、理屈で。

——まぁ、変態は別としても、久内さんて理屈が好きじゃないですか。歴史物とか好きだし。

久内　そうですね。歴史って理屈があるからね、ホント言うと屁理屈が好きなんですよね(笑)。数学みたいに、あそこまで完璧な理屈になっちゃうと、人間のドラマとかが入る余地が無くなっちゃいますから。何かやっぱりウェットな理屈が好きなんですよね(笑)。

第二弾の長編は〝文化大革命〟で、

——久内さんの漫画は、どこの国かわからないヨーロッパ的な所が舞台になっている物がいくつかありますが、それは特別な理由ってあるんですか？

久内　いや、ただカッコイイから(笑)。

——ただそれだけ？(笑)

久内　屁理屈でも何でもないですよねぇ。これ困ったなぁ(笑)。

——でも、このところ、中国風の話とかそういった絵も多いですね。

久内　あ、中国はね、好きなんですよ。最近ですけれどね。中国に行ってから。

——以前から憧れていた、という事ではないんですか？

久内　うん、結局ね、何でそんな事になったかっちゅうと、ちょうど高校の時に中国で文化大革命が起っていて、「わーっ、革命やってる、凄いなー」て言いながらもそれがどういう事なのか全然分からなかったんですよ。で、高校の現国の先生っていうのが、教室に入って来るなり、「カムイ伝」の話をするような人で、僕はその先生が好きだったんです。で、その先生がまた中国が好きだったらしくて「今の中国は面白いよー」って言ってね。「何か訳わからんけど凄いんやなぁ」と思ってて(笑)。

　で、その後解放政策を取り出してから中国の本が一杯出始めたでしょ。で、僕も中国に行ったりして。まあ、そおゆう社会主義国の国って珍しいですから、凄いなぁと思いながら帰って来てね。それで中国の本を読み出すうちにどんどん好きになってきたんですよ。

——でも、好きになっても、久内さんみたいに、人民帽かぶったりしている人っていませんよ、なかなか(笑)。それに今日なんか、ソ連の防寒帽じゃないですか。

久内　ま、これも野次馬的感覚ですね。基本的にはね、僕らが高校の頃って、「一億総心情左派」みたいな感じがあったじゃないですか。まだ共産主義の破綻ていうのが無い頃でしたし、やっぱり進歩的な学問だと思っていたんですよ。その頃はね、まだそういう素直な気持ちだったんですが、最近は中国にしろソ連にしろ理想じゃなくて、共産党内の権力闘争みたいなのが面白いな、と思ってね。だから昔に比べると、今共産圏が好きなのはやっぱり野次馬的な見方ですよね。「好きだ」って言っても、絶対に住みたいとは思いませんからね(笑)。

——また、「托卵」に続く、第二弾の長編の構想がある、とうかがいましたが、それは中国が舞台になるんですか？

久内　ええ、とりあえず、文化大革命を背景にした長編を描こうと思っているんですよ。

——それはどういう形で……。

久内　実は「チェン村」という本があって、中国の片田舎に文化大革命がやって来たその様子を、全くのノンフィクションで描いているんです。元チェン村に住んでいた人とか、下放といって、中国の青年達に「労働を肌で学べ」といって農村に送りこんだりしていたんですね。そうやって一時期チェン村にいた青年達から、後になって話を聴いたり、取材したりして書かれた本なんですよ。これが大河ドラマみたいになっていてね、それが中々面白いんですね。それをたたき台にして全部漫画にしたいと思って。でも、長編といったってきかない位の量なんで、とりあえず、その中の一部を、と思っているんです。

　村の中に派閥が出きたり、そういう個人的な感情が全部政治的レベルになってしまったりね、その辺が色々流転したりする話なんですけどね(笑)。

——狭い地域の中での激動ですね。好きですね、そういうの(笑)。

久内　基本的に、そういう中での構造とかをカイマ見るのが好きなんですよ。

——エロ劇画誌に描いていたような作品は、もう描くつもりはないみたいですね。ある意味では、ひとつの転機が来たのではないですか。

久内　もう、ああいうのって、ネタが出てこなくなっちゃったんですよ。やっぱり欲求が渦巻いてないとダメでしょうねえ(笑)。まっ、別に色んな所で解放しているワケじゃありませんけれど、ビデオ

観ながらひとりでやっている方が楽なんだ、とかね(笑)。

—でも、小綺麗な絵でエッチな漫画を描くのは当時珍しかったから、印象が強すぎたのかもしれませんね。

久内 エッチな漫画を描いていた時は、それはそれで好きだったんです。よく、「どの作品が一番好きですか?」ってきかれるんですが、ちょっと甲乙付け難いんですよね。ここ4、5年の内に、何もネタが無いのに、仕事だからとやっつけで描いた、というのが出てきましたけれど(笑)。それまでは割と短くても長くても、平等に好きでしたね。

仙人の素質!?

—文化大革命のほかには、描きたいものってあります?

久内 いえ、文革以外は今のところないんですよ。このテーマを描き終えてみないと、わかりませんね。昔だったら、テレビを見たり、どこかへ行った時なんかにね、身近で面白い話を拾ってきたりしていたんですが、最近、あまり浮かばなくなりましたね。「托卵」にしても、日常生活とは舞台がまるで違うワケですから、そういう意味では、すごく現実的な風景をそのまま直接テーマにして描く、ていう事は出来なくなりましたね。

—そうですか。久内さん、もしかしたらこのまま行ったら仙人になっちゃうんじゃないですか?

久内 ああ、それはもう憧れですよ。何もしないで、週に一回ソフトボールだけしてね(笑)。

—それって単なる怠け者じゃないですか(笑)。

久内 うん、だからね、ソフトボールの好きな仙人(笑)。

—またそういう屁理屈をっ!!(笑)ところで最後にひとつききますが、4年間東京に住んでいて、またどうして京都に戻ったんですか?

久内 その頃、好きな女のコが大阪に戻った事もありましてね、それにね、僕は歯が凄く悪かったんですよ。歯はちゃんと治した方がいいかな、と思って、それで戻ったんです。

—東京にも歯医者はいっぱいあるじゃないですか。

久内 だって健康保険持ってなかったから、お金がかかるじゃないですか。

—ただそれだけ? 久内さんと京都って、切っても切れないような深いつながりがある、と思っている人も多いようですよ。

久内 いや、ホントにただそれだけ(笑)。

—そういう所が不思議なんですよ。元々、仙人の素質を持っているんじゃないですか、もしかしたら。

久内 そうですねぇ(笑)。

1992年2月5日
京都にて
文責・編集部

(筑摩書房・定価3914円)